

# 矛盾を感じることの矛盾

——オーウェル『ライオンと一角獣』をめぐって——

大 沢 正 道

ジョージ・オーウェルの著作に『ライオンと一角獣』と題するパンフレットがある。

『ライオンと一角獣』というと、なにか短篇小説の題名を連想されるかもしれないが、副題は、「社会主義とイギリス精神」となっており、三部に分かれたタイトルは、それぞれ「イギリス、君のイギリス」「戦う商人国民」「イギリス革命」とついている。つまり、これは短篇小説ではなくて、オーウェルの社会主義論なのだ。

書名は、その本の全内容を凝縮した顔のようなものだ、あだおろそかに扱ってはならぬ、とどこかで内村剛介が書いていたとおもいますが、オーウェルも、自分の著作の題名には全精力を注ぎ込んでいる。

この「ライオンと一角獣」という、社会主義論をテーマにした著作にはおおよそ似つかわしくない書名を、オーウェルはなぜあえて選んだのか、それがたんに気の利いた文句をもてあそぶていのもではないだけに、ぼくの疑問はふかまるのだ。

ぼくらにとっては、「ライオンと一角獣」といわれても、よほど

教養のある方々はべつとして、なんのことやらびんとこない。副題になっている「社会主義とイギリス精神」の方がはるかに分りやすい。しかし、イギリス人読者にはすぐびんと訴えるものがあるはずだ。なぜなら、「ライオンと一角獣」は、イギリス王家の紋章を支持している二頭の動物なのである。

もの本によれば、ライオンはもともとイギリス王家の紋章として用いられており、一角獣の方は、スコットランド王家の紋章であった。それが連合王国になった時点で、一つにまとめられ、現在の紋章が定められたのだという。

つまり、イギリス人がこの言葉ですぐに連想するのは、イギリス王家のあの紋章である。それは、菊花と書かれて、ぼくらが天皇家の紋章を連想する以上に、ストリートに結びついている。

なぜオーウェルは、自分の著作の書名に、イギリス王家の紋章を連想させる言葉を選んだのだろうか。日本でいうならば、さしずめ『十六弁の菊花——社会主義と日本精神』という、国家社会主義のパンフレットにありそうな書名を選んだのだろうか。

その詮索にはいる前に、このパンフレットが書かれた背景を明らかにしておく必要がある。

オーウェルは、第一部「イギリス、君のイギリス」の冒頭で「私がこれを書いている今、高度の文明人どもが私を殺そうとして頭上を飛んでいる」と書いている。また、第二部「戦う商人国民」の冒頭は、もっと深刻である。

「私はこの本をドイツ空軍の爆撃のどろくなくで書き始めたが、今この第二部を書き始める時、味方の弾幕砲火がその喧騒をさらにかきたてている。高射砲の黄色い閃火が夜空を照らし、破片が音をたてて屋根に降りそそぎ、ロンドン橋が落ちる、落ちる。」一九四〇年八月から十月という、ドイツ空軍のロンドン爆撃が激烈をきわめ、ドイツ軍によるイギリス本土上陸作戦真近しの噂がひんびんと飛んでいる最中、それがこの著作の執筆期間なのだ。

ちょうどこの期間に、オーウェルは日記をつけているが、それを讀むと、当時の彼の心境がよく分る。三つ四つ、抜萃してみたい。

「ドイツがイギリスを征服してしまった場合、どう行動すべきかをまだ決めかねている。この土地を後にすることだけは、断じてすまいと思う。やむを得ない場合でも、アイルランドまでに行こう。海軍が無事であれば、アメリカなり自治領なりから戦争は続けられようから、たとえ収容所にいられようとも、なんとでもして生き続けねばならない。もしアメリカ合衆国も屈服するということになれば、戦って死ぬ以外に道はない。しかし、その場合は、まず戦って、から死なねばいけない。まず敵を殺す満足感を味わわねばいけない。」(六月十六日付)

「E(オーウェルの妻)、G(Eの兄の妻)も、最悪の事態が来

る、いやな夢を見た。スペインでの終り頃によく見た夢がある。ささぎもののない草の土手にいて、白砲の弾丸が近くに落ちる夢だった。」(八月二十九日付)

これらの日記が語っているような、ぎりぎりの状況のなかで、オーウェルは、『ライオンと一角獣』を執筆したのである。

それは、オーウェルと彼の友人で作家でもあったT・R・ファイヴェルの二人が編者となって企画したシリーズ、サーチャイト・ブックスの第二冊として、一九四一年二月に刊行されている。このシリーズは、サーチャイトという標題が示すとおり、戦時下の諸問題に焦点をあて、その解決策を提示することをねらった企画で、ドイツから亡命してきた反ヒトラーのジャーナリスト、S・ハフナーの『ドイツに対する攻撃』などもはいっている。

ところで、オーウェルは、一九三九年一月四日付、ハーバート・リードにあてた手紙にみられるように、第二次大戦の起こるほんのすこし前(第二次大戦の勃発は同年九月)に、「私たちのようにきたるべき戦争に反対しようと思う者は、合法的な反戦活動をするため組織作りを始めることが、絶対に必要であると私は思います」と述べ、この計画に賛同を求めている。

この手紙は、病氣療養で半年ほど転地していたモロッコで書かれたもので、いわば本国の情勢から取り残された者の情報の不足と焦りなどがそこに反映されている、と見ることもできよう。それにしても、非合法の反戦組織の結成まで考えていた彼が、九月三日、開戦となるや、手の平を返えすように戦争支持を宣言し、反戦の立場を守っていた独立労働党を脱党し、陸軍に入隊を志願する(これは肺疾患のため、陸軍の方から断られ、オーウェルはたいへん口惜し

るようなら、私はカナダへ行くべきだという。生きのびて宣伝活動をするためにだ。たとえばイギリス政府がカナダに移って、私にもなんらかの仕事があるというのだったら、行ってもいい。しかし、逃亡者としてではないやだ。亡命ジャーナリストとして、安全地帯から声を張りあげるのはいやだ。そういう亡命「反ファシスト」なら、すでに多過ぎるくらいにいる。やむを得なければ、死んだ方がましだ。国外にのがれて、他人の慈悲にすがって、役にも立たぬ人生を続けるより、一個の死の方が、宣伝としても大きな力をもつだろう。なにも、死にたいというわけではない。身体も弱い子供もないが、それでも、生きていてほしいことはたくさんある。」(六月二十四日付)

「ふところ具合が全く悪くなりつつある。……税務署に長い手紙を書いて、戦争によって生計の道を断られたが、政府はいかなる仕事も与えてくれようとはしない、と言ってやった。こんな悪夢のなかで本を書くなんてことはできない。作家には生きにくい時代だということを、国は理解してくれない。……できるものなら税金は払わないですまない。その点では、政府に対して良心のとがめを感じない。それでいて、イギリスのために、必要とあらばいつでも生命をささげるつもりでいる。税金については、だれも愛国的にはなれないのだ。」(八月九日付)

「……Eも私も、空襲にはできるだけ注意を払わないようにしている。正直のところ、空襲が引き起こす混乱やなんかを別にすれば、空襲に少しもわずらわされないでいるつもりだ。それなのに、今朝、いつものように、夜の見張りから帰ってきて、二時間ほど眠った時に、爆弾が近くに落ちて、恐怖に頭がおかしくな

がった)ほどに変貌を遂げたのは、どうしてだろうか。

オーウェル自身のそれについての釈明は、一九四〇年八月に書かれた「右であれ左であれ、わが祖国」に見出される。彼は、そのなかで、一九三九年八月二十三日、独ソ不可侵条約が発表される前夜に見た夢について語っている。それは、戦争が始まった夢で、この夢を通じて彼は二つのことを知った。「第一に、長い間恐れていた戦争が始まってしまえば、私は単純にほっとしてしまうだろうということ。第二に、私は心の底では愛国者なのであって、味方を妨害したり裏切ったりはしないだろうし、戦争を支持するだろう、できれば自ら戦いもするだろう」ということである。

この夢は、まさしく正夢であった。そして、オーウェルは、やや居直った形で、次のように述べていく。少し長文だが、読んでほしい。

「なぜ私は第二次大戦を支持するか、理由を論証する必要に迫られれば、立派にやっつけられると思う。現実にある選択肢は、ヒトラーに抵抗するか降服するかどちらかしかないのである。とするなら、ひとりの社会主義者の立場からすれば、私は抵抗する方がよいとしか言えないわけだ。ヒトラーに降服せよということになれば、スペインにおける共和主義者の抵抗や中国の日本への抵抗などが無意味になってしまう。しかし、だからこそ私の心の底(emotional basis)から戦争を支持することになった、などと厚かましいことを私は言わない。あの晩の夢で私が知ったのは、中産階級が通れるような愛国主義のトンネルは、長い掘削の末、ついに貫通したのだということであり、いったんイギリスが危くなくなってしまったら、私にはサボタージュはできないということだっ

た。しかし、意味を取り違えないでほしい。愛国主義は保守主義とは何の関係もないものである。愛国主義とは、変わりつつあるが同時に同じものだと直観的に感じとられているようなあるものに對し、身を捧げることである。それは元反革命派だったボルシェヴィキがロシアに献けるような献身に似ている。チェンバレンのイギリスと明日のイギリスとのどちらにも忠誠であるという事は、忠誠とはひとつの日常的な現象であるに過ぎないと分かっている者には、不可能事に見えるだろう。革命のみがイギリスを救える、このことは数年来自明のことだったが、今や革命は始まった。だからヒトラーを締め出しておきさえすれば、すみやかに革命は進行する。二年以内、いや一年で、もちこたえてさえいれば、先見の明のないばかり者どもの目をむくような変革ができるのだ。その時、ロンドンの溝という溝は血でいっぱいになるに違いない。よろしい、そういうこともやむを得ない、必要であれば。しかし、赤軍の民兵がリッツ・ホテルに泊まる時には、私はやはり、ずっと昔、さまざまな理由から愛さなければならぬと教えられたイギリスが、なおも体内に生き続けていることを感じていた。

ここでオーウェルが、「しかし、だからこそ私の心の底から戦争を支持することになった、などと厚かましいことを私は言わない」と述べている点に、とくにほくは注目したい。

なぜ「だからこそ私の心の底から戦争を支持することになった」というのが「厚かましいこと」なのか。「厚かましい」とは、そもそもどういふことか。これはおそらく、オーウェルでなければ吐くことのできなかつた、謙虚で真率な言葉ではないだろうか。

持主は、間違いない、革命の時が来れば、すくんでしまいうだろう。とまで極言している。

「ゴッド・セイブ・ザ・キング」と「ユニオン・ジャック」が出れば、「ライオンと一角獣」も、どうあつても登場してこなければならぬ。オーウェルが、存亡の危機を問われているイギリスに向けて、危機打開のプログラムを提示した文書の書名に、この言葉をもってきたことは、だからきわめて当を得たものとならざるをえない。それはまさに、オーウェル流の「戦争を内乱へ」の戦略であったのだ。

この時、オーウェルは、おそらくはスペイン革命の体験を想起しながら、一つの大きな賭をしたのである。反ファシズムとしての戦争にイギリスの民族精神を総動員し、それをイギリス革命に向けて発展させようという……

この賭は、見事に失敗に終わった。それはたぶん、第二次世界大戦が、スローガンはともかく、内実は反ファシズム戦争としてよりも帝国主義戦争として終始したからであろう。しかし、祖国の危機という極限的な場に立たされた際の、社会主義者オーウェルのこの「現実主義」は、なお吟味すべき多くの内容をはらんでいる。

ここにオーウェルの「転向」や「矛盾」を指摘することはもちろん可能であるし、容易である。しかし、そのようなとらえ方からはおそらくありきたりの結論しかでてこないだろう。そうではなくて、それを「転向」とか「矛盾」とみる立場そのものに矛盾を感じることができれば、オーウェルの「現実主義」は、今日的課題としてばかりに迫ってくるはずである。

第二次大戦を反ファシズム戦争と受けとめ、ヒトラーへの抵抗とみなすことは、頭では十分に納得しうることである。しかし、ファシズムに身をさらけだして戦ったスペインの大衆、あるいは中国の大衆のように、頭でというよりはもつと根底的に、心の底まで反ファシズム戦争を支持するほどにはなっていない、とてもそんなやり方にはなことは申し上げられない、——オーウェルが使った「厚かましい」には、こういう意味がこめられていたにちがいない。

オーウェルを戦争支持に踏み切らせたのは、ヒトラーに抵抗するという頭のなかの理論だけではなく、まさしくもつと単純にイギリスを外敵から守るという、子供の時から植えつけられた愛国主義の感情であった。彼はこの感情から噴き出るエネルギーを反ファシズムとしての戦争の側に総動員し、それをさらにイギリス革命に発展させる戦略を体験的に構想したのである。人間の感情から噴き出るものがないかぎり、革命を成就することなど白日夢である。左翼知識人に対するオーウェルのかねてからの批判は、彼らがつねに頭でっかちで、この感情、心底から噴き出るものを無視、ないしは軽視するところに向けられていた。「中産階級が通れるような愛国主義のトンネルは、長い掘削の末、ついに貫徹した」というのは、このことを意味している。

そこでオーウェルは、「ごく普通の感情が分らなくなるほどに『目ざめ』ている左翼知識人」よりは、「ゴッド・セイブ・ザ・キング」が奏されている間、起立して傾聴してないと、なにか神聖なものがけがされたように感ずるしつけ方をされた方がよかつたと思うと語り、さらに進んで、

「ユニオン・ジャックを見ても決して心おどらないような心臓の

### 直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝で『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

購読料の払い込みは振替（東京一〇二四六五番）か現金封筒の利用が、一番確実安全である。切手で代用されてもよい。

#### ◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京Ⅱ文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、模索舎、麦社、川崎Ⅱ甘露書房、仙台Ⅱ八重洲書房、名古屋Ⅱちぐさ文館、名古屋ウニタ、京都Ⅱ三月書房、京都書院、ふたば書房、大阪Ⅱ大阪ウニタ、曽根崎書房、神戸Ⅱイカロス書房、北九州Ⅱ未来書房、札幌Ⅱアテネ書房。